

2018 年度教養文化研究所・比較法研究所共催公開シンポジウム報告

教養文化研究所所長 井 上 久 士

日 時：2018年12月11日（火） 15:00～16:30

場 所：駿河台大学 AV ホール（7404 教室）

特別講演：「現代社会の変容を考える—フランス現代思想から—」

講 演 者：本間邦雄（ホンマ クニオ）氏（駿河台大学名誉教授）

司 会：井上久士教授（所長・法学部）

コメンテーター：山下尚一准教授（グローバル教育センター）、J.Matthews 講師（現代文化学部）

司会 それでは、時間になりましたので、始めたいと思います。私、教養文化研究所の所長をやっております、井上でございます。よろしくお願いいたします。今日はよろこそ、参加していただいて、ありがとうございます。教養文化研究所では、大体毎年 11 月か 12 月ぐらいにこのようなシンポジウムを開いておりますけれども、去年は、現在の中国と日本との文化的な交流の問題を扱いました。今年は本間先生をお迎えして、「現代社会の変容を考える—フランス現代思想から—」ということで、去年とはだいぶ違いますが、現代社会を別の視角から考えるシンポジウムを企画いたしました。

本間先生は、本学に長く教鞭を執られておりまして、現在は本学の名誉教授をされております。今は秋学期なので、学校にいらっちゃっていませんけど、春学期にはまだ講義も担当されて、週に 1 回ぐらい来ていただいております。本間先生は、フランスの現代思想や比較思想、こうしたことがご専門で、もちろんフランス語は達人でいらっしゃいます。以前はこの研究所の所長も務められていた、私にとって先輩に当たる存在でもございます。私はアジア関係のことを研究しているので、いつも教えられることが多いんですが、なかなか難しく、またお互いに忙しくて本間先生のお話をゆっくり聴く機会が、本間先生在職中ほとんどありませんでした。そういうことで今日は期待しているところで、私も勉強したいと思っております。

今日は大体の予定といたしましては、本間先生に

40 分ぐらいメインの報告をいただきまして、それから、こちらに座っておりますグローバル教育センターの山下先生、現代文化学部のジョエル・マシューズ先生のお二人の方から、それぞれ専門の角度から、その問題についてのコメントといえますか、簡単なお話を 10 分程度ずついただきたいと思います。その後、時間があれば、皆様方から、ご質問やご意見をいただければと思っております。それでは、本間先生、よろしくお願いいたします。

現代社会の変容を考える —フランス現代思想から—

本 間 邦 雄

本間 はじめまして。本間邦雄と申します。私は本学に開学以来勤めておりまして、30 年近く、今は非常勤で来ております。本学には教養文化研究所というものがあって、ここでは専任教員は、何らかの形で、月々の例会などで発表することになっているんですね、今でも。ところが、私は一度も発表しておりません。なぜかという、20 年ぐらい前ですか。発表予定があったのですが、急遽、他の会議に変更になりまして、私はお役御免ということになったんです。そのことが若干心残りって言いますか、負債を抱えてるようだったのですが、今日こういう機会を与えられまして、皆さんにお話をすることになりました。よろしくお願いします。

さて、皆さんのお手元にあります資料に沿って、40 分ほど、まずお話ししたいと思っております。前世紀と言いますか、20 世紀の 80 年、90 年代ぐらいから、町を歩く人々の様子も相当変わってきて、携帯電話が 90 年代の後半から一挙に普及して、今世紀の今から 10 年ぐらい前ですか、スマートフォン。今、日本ではスマートフォンなんか言わなくて、「スマホ、スマホ」って言ってますけども、学生の皆さんも、おいでいただいた方々も、電車の中とか町中で様子が変わってるのは実感されていると思います。

そういうようなことを、どのようにして見たらいいかということについて、ちょうどこの 9 月に亡くなったんですが、フランスの都市計画家、思想家のポール・ヴィリリオという人がいまして、彼が 1970 年代ぐらいから独特の考え方を提示していました。日本でも 80 年代から、翻訳されたり、雑誌で扱われたりしておりました。現代社会について非常に鋭い感性で思考した人なんですが、彼の見方を皆さんに大まかに紹介して、参考にしていただけた

らと思います。略歴は、プリントに簡単に書いておきました。

まず、彼の著作などによく出てくるのは、機械とか速度とか、そういうことなんですが、機械については一般に文明論的にも社会学者もいろいろ言ってます。大まかに現代を考えるために、今がどのような段階と言っているのか。というのは、文明は前の段階が全て消えるわけではなくて、それを包み込んで、更に新しいのが出てくるという形を取りますので。それを踏まえて、皆さんご存知の方も多いかもかもしれませんが、ご紹介してから進めたいと思います。そのためには、同じく 20 世紀後半に活躍した哲学者のドゥルーズという人がいまして、日本でも翻訳書は 10 以上あります。「21 世紀はドゥルーズの世紀だ」と言った思想家もいますが、ドゥルーズの見立てを少し見ていきたいと思います。

何事も三つに分けて考えるっていうのは、どの分野でもよくあることで、歴史的な社会と対応する機械の 3 段階を考えます。第 1 段階の君主制社会というのが、これは非常に広い、王国とか帝国とかができるからと考えていいんで、つまりエジプトのファラオの王国から 17 世紀の絶対王政ぐらいまで、大まかに言っているのかもしれませんが、その時代の君主制社会では、対応する機械というのは、滑車とか時計仕掛けでした。

ところで、もともと機械がどのようなものかというのは、これもまたいろいろな考え方があって、漠然としてるんですが、簡単に言うと、道具と機械の違いっていうのは、道具はハンマーならハンマー、かなづちで、つちが金属じゃなくて木や石の場合もありますけど、人間が力で与えたそのとおりの運動を拡大して伝えるっていうことですね。ハンマーでも、その他のいわゆる道具とされるものは。ところ

が、機械というのは、人間が力を与えたものをそのまま材料・素材に作用するんじゃなくて、何か少なくとも一つ以上を接続して、連関して、別な要素が入って別な運動をさせるというのが、機械の定義と言う人もいます。機械もいろいろ論議があって、定義が大変なんですけど、道具は、一つの力、手や足でというふうにしたら、そのまま力が伝わる。今日でも使ってます。機械というのは、ある力を与えたら、その力がそのまま伝播するんじゃなくて、何かに変換されて伝わる。

20 世紀のアメリカの文明学などで日本でもよく知られてるルイス・マンフォードという人は、最初の機械は弓矢だと。つまり、弦を張った弓と矢があって、弦を引っ張る力で、手を放して矢が前へ進むわけですね。だから、引っ張ることによって何かを引き寄せるような場合、それは道具になります。ところが、引っ張ることによって、その弦。多分、植物か何かでしょう、最初。弓矢の方は木でしょうけど、引きしぼって手を放すという連関がありますよね。ですから、そういうふうな形のものを、機械だと言った。

そんなことで機械というイメージをまず持って、それから時計仕掛けというのは、日時計・水時計から始まって、あるわけです。農耕ができて、メソポタミア、エジプトの時代から日時計・水時計等はあったと思うんですが、それは人間の身体・能力の延長ではなくて、天体の運動を模倣して、1 日のリズムなり、そういうものとしたと考えられます。ですから、時計というのは人間の身体の模倣ではなくて、農耕とも非常に大きく関係すると思いますが、天体の動き。日中は太陽の動き、夜は、北極星を中心に天体。それを模倣していると考えることができます。当然、時計回りというのは、太陽あるいは星の巡りの回りですね。それが、初めの第 1 期といわれる時の機械論。

そのあとに、皆さんよくご存じの産業革命で、蒸気機関でエネルギーを産出する。それによって、機械を動かす。この場合は、初めは石炭だったんですが、熱エネルギーを産出して、そのエネルギーを運動エネルギーに変えて物を動かす、物を作るという

形になるのが第 2 期。このときが、規律社会といわれていますが、18 世紀後半から 19 世紀、20 世紀にかけての資本主義の隆盛の時代になってきている、そのような時代の社会。ある意味では近代の文明社会ということなんですが、そこにも、ばら色とは限らないいろいろな問題があります。

いよいよ 20 世紀の末、90 年代ぐらいから、ドゥルーズという人は、「コントロール社会になるのではないか」と。要するに、第 3 期の管理社会ということですね。このときの機械というのは、情報処理機械としてのコンピューターなどの機械です。皆さんもお分かりになるとと思いますが、情報を加工して、その情報によって、自動制御システムですか、オートメーションという、情報に対してそれをプログラミングして、工場で物を作るとか、あるいは電力のさまざまな利用。現在使われているいろいろなものは、情報を基にして、その情報を加工して、それがないと今日の社会は成り立たないぐらいになっているというのは、言をまたないことだと思います。この三つです。今の第 3 段階のところの問題点を、今日は主にお話ししたいと思います。

項目としては次のところで、ヴィリリオの話になりますが、彼は、速度、速さですね。それをテーマとした事実上最初の人。もちろん今でも速度という言葉はあるし、物理学等で使われるわけですが、それを広く速度として考えた。つまり、第 3 段階の世界の様相は、速度を通して見ると、その特徴が浮かび上がるという考え方。世界は常に運動している、走行している、速度があるというふうに見えるということを提示しました。私たちは、ふだんこうやって座ってて、たまに私が歩くのが動くということだと思っています。普通は動きは少ないですよ。ところが、速度社会では、相対的にいろいろ動きますが、それらの動きの中で相対的に速いものや遅いものがあったり、逆に静止しているもの。静止しているのは後ろへ退いていくように見えたりしますが、そのようなものだと見る。

これは私がよく前から例に出すんですが、高校の時サッカーやってたので、イメージよく分かるんですけど、サッカーの試合で、両軍がキーパー入れて

11 人いるんですが、動きますね。それを個人個人と見ないで、集団の運動と考えて、アメーバ状の、二つの走行領域がこうやってクロスし合って、その中で相対的に速いボールの運動がある。サッカーの試合の場合、特に得点とかゲーム展開に関係するときはそうですね。そういうふうに、速度の世界、走行領域、走行圏ということがまずベースになって、それがノーマルな状態で、たまにストップしたりすることがある。このように逆転して見たらいいんじゃないかということなんです。

1. 速度と権力—速度機械

歴史を見ても、簡単に三つ挙げておきましたが、最初の大帝国といわれる、今のメソポタミア地方のアッシリアの戦車隊。戦車は、当時はもちろん馬です。馬で戦車を引いていた。道路もきちんと造って、駅伝制を敷くという形で帝国を支配しました。ですから、何かあったら首都に駆けつけるし、何か急があったらすぐ軍隊を派遣できたり、管理をするための帰趨を担うのが、速度を掌握してるってことです。早く行ける。敵対する側にとってみれば、何か向こうに伝わったら、すぐそれに対応するものが来るというふうに思わせることも含めてです。

それは陸の話で、もう一つは、これも有名な古代ギリシャのアテネ。アテネがペルシャ帝国の大海軍に勝ったのは、アテネの「ガレー船」とも呼ばれる三段櫓船（かいせん）。3段になってオールを人がこぐんです。それは、市民がこぐ。むしろ下層市民なんですが、奴隷ではないです。奴隷の漕ぎ手はローマの時にはあったと思いますけど。それはすごいスピードが出るんです。その舳先を向けて、相手の横っ腹を突き破るんです。突進するんです。そこから乗り込んだりもするんですけど、速度が海戦の鍵を握る。三段櫓船を多用してペルシャ海軍を、サラミスの海戦ですか、打ち破りました。したがって、海にとっても、速度がとても重要だった。

もう一つ、空のことで言うと、今では皆さんそんなに話に出ないということですが、伝書鳩です。これは、通信手段で当時の最新・最強、一番確実な伝達手段だった。もともとエジプトやローマ、イギリ

スとかにはあったんですが、これがはっきり出たのは、中世。何度かにわたって、100 年以上にわたって十字軍が遠征しましたが、最終的に撃退されました。あれは、伝書鳩を効率よくきちんと使って情報を握ってたのは、当時のアラブの王朝、あるいはその將軍たちだったんです。中世には、ヨーロッパにも伝書鳩は多少知られていたけれど、組織的にネットワークを作って使うようなことはなかった。そのあとヨーロッパにも本格的に導入されますが、伝書鳩というのが、とても大きかった。今、どこにどの軍がどれだけいるみたいなことを含めて、皆さんも想像はすぐにつくと思います。

したがって、このようなドロモクラシーという走行体制の社会に、この世界史の 1,000 年、2,000 年あったということなんです。今でもあるんですが、それがちょっと極端に来ているという話なんです。

その次の自動車ですね。「自走装置」と書いたのは、オートモビルですから、オートが「自動」で、モビルが「動く」です。自動車の「自動」っていうのもそうなんですが、レーサーといいますか、車の走行実験みたいなイメージの中で、それをヴィリリオが言っていて、地平線が事実上はなくなると。どこか目的地があって、そこに行くっていうのが、地平線、海の場合は水平線ですけど、それがどんどん遠のいていく、乗り越えられていくということで、『ネガティヴ・ホライズン』という形で本にしました。

今の問題は、道のりの問題としましては、主体のシュジェに対して、客体あるいは目的がオブジェ。英語で言えば object。この中間のところはトラジェで、私のプリントの方では移動行程、道のりと書いてありますが、ここが、ほんとに中途半端になって、これが事実上省略されてなくなるところまで高速化が進んでいるという、それが現在だと言ってるんですね。そうすると、地平線は、彼方にしかるべき目的地として構成されるんじゃないくて、眼前がただスクリーンとなってどこまでも続いていって、終わることのない、そうした状況になっている。したがって、固有の次元に入っている。私たちは、そういう高速の次元に入ってる。

2. ヴァーチャル世界の優位 ―『視覚機械』

次のところに行きますが、自動車、自走装置から今度は視覚、見ることについて。「ヴァーチャル世界の優位」ということで、これは皆さんも実感されてると思うんですが、従来の図像や写真とかというのは、ある本体があって、実物があって、それに代わって指し示すもの。地図なんかもそうなんですけど、そういうものとしての役割を果たしていたんですが、今日のモニター画面などに登場するのは、ヴァーチャルな遠隔現前。「遠隔」と日本語で訳したのは、テレです。テレビジョンは今ではテレビでみんな通じるんですけど、その元の意味を意識してもらうために、テレと書きました。遠くにあるものがすぐ目の前のモニターで見えるということで、難しいことを言ってるんじゃないですが、その場合は、リアルタイムの映像としては、本体に代わって映像の方が優先される。現在の状況を左右するものとして、ヴァーチャリティーの方が、リアリティー、実在性よりも優先されるということです。

これも今日の例では、地図を持って歩く人は少なくなっていますが、地図を持って歩く時には、まだ地図というのは副次的なものです。ところが、現在では、スマホを持って歩くということになります。スマホの指示に従う。スマホの映像や地図といったものが信憑性があって、それに頼ってお店などに行く。その極端な例が、例の「ポケモン GO」の場合。あの場合は、完全にヴァーチャル世界を構成してたんですね。私はやったことないけど、私の近くの公園でも去年、おとしあたりから、ある時間になるとどっと人が、若い人だけじゃなくて、赤ちゃんを抱いたお母さんもいたり、年配の方もいろいろいるんですが、あれなんか、はっきりそうですね。リアリティーはあくまでも副次的なもので、ヴァーチャルの世界の方が目的で、優先してそれを探すということ。ですから、実在性の概念を、ヴァーチャリティーが転倒するということになるでしょう。

そうしますと、ヴァーチャル・イメージに取り囲まれる次元というものが、優位に立つことになります。このことについてヴィリリオは、「速度は、それはまさしく世界の老化である」と言います。つ

まり、速度が増強されて人間の移動能力が拡張すると普通は考え、もちろんそういう面もあるんですが、そうではなくて、いわゆる地理的な空間の意味が、ほとんどなくなってくる。よく「世界が小さくなる」と言いますよね。そのことで言うと、リングがしなびるように世界がしなびる、速度が増すということは、地球は科学の進歩に対しては小さすぎるということで、速度の問題と地球の問題。このことも、身体能力の補助、機能の拡張という面もあるので、一概にどっちって言えないんですが、確かに人間の身体機能が拡張する面もありますが、実際飛行機の中では、「シートベルトをきちんと巻いてください」と言われて、静止して何とか症候群になるというようなこともありますので、非常に両義的な面があるということは、理解されると思います。

3. 情報爆発社会とヴァーチャル世界の蔓延

さて、そのようなヴァーチャル世界の優位の中で、それらが作動するものとなるのは、やはり情報ということになります。「情報爆発社会とヴァーチャル世界の蔓延」とあるように、第3段階の機械論に対応するところは、ヴァーチャリティーで、地理的距離の廃棄。リアルタイムの優位ということで、もう日本でも片仮名で通じると思いますが、強いて訳すると、「即時」とか「同時」ということになります。リアルタイムの、しかも双方向性。お互いにやり取りする。それが、30 万 km / 毎秒の速度で、電子もそうですね。1 秒間に地球を7周半する。地球の大円の周が4万 km ぐらいなんで、太陽も7、8分で光が届くとかいう光速速度です。その光速によって、そこで起こる出来事ややり取りが、ほぼ絶対的に優先されるような世界に変わりつつあるということですよ。

その場合の情報そのものも、爆発的に拡大していきます。情報については、情報工学など専門的な議論、見方もいろいろあるでしょうが、ヴィリリオは別に特別なことを言ってるんじゃないくて、情報は情報を生むわけですから、今、データがすごく累積されているんですが、そこから検索して何かを引き出すことが何かを作ることだとすると、情報は短時間

に非常に多くのものを作る、生産することができる。オートメーションなども、物を生産する場合、自動制御で、情報処理でコントロールが非常に重要だということは理解されますし、もう一つ、「情報は人も動かす」。これもヴィリリオが言ってるんですが、情報によって人の思考や感情が刺激され、行動する。このような情報が、短時間で、しかも電気エネルギーを使うんですね。電気エネルギーを使うと、非常に短時間に莫大な量の情報が処理され、作られるという、そういう時代にあるということです。

そのような情報爆発社会においては、情報が爆発してるから、捉えどころのない世界で、そういうものが私たちを覆ってるんじゃないかと思うかもしれませんが、それだけではなくて、われわれの記憶や、意識的・無意識的な映像、記号、記憶なども、情報メディアによって画一化されつつある。私たちは、テレビだけではなくていろいろな情報を見て、それが経験として共有される。それがだんだん増えてきて、だんだん画一化されつつある、普通に暮らしていると、で、そういうものに対する刺激というのがあって、それがマーケティングの対象になる。それによって欲望や欲求を刺激して、それを購買行動につなげるみたいな、そういうこともあります。

つまり、内面とされる記憶や想像などもパターン化されていて、それらの言語とか映像、記号といったものが、ヴィリリオの言葉で言うと、グローバル化された世界の電子的エーテル。エーテルというのは、宇宙を覆ってる何かがあるんじゃないかという、現代科学では「ない」ってことになってるんですが、そのエーテルに巻き込まれて、それを比喩的に用いて巻き込まれてるというわけで、私たちが個人的な、内面的な、あるいは自分にとって非常に奥深いものと思っているものが、自分の中で蓄積されている映像とか、そういったものに左右されている可能性がかなりある。

一つの例としてヴィリリオが挙げるんですが、オリンピック。オリンピックは、資本主義社会のメディアの祭典になってるわけですが、1980年代ですか。アメリカのロサンゼルスで成功してというようなこともご存じの方もいるかと思いますが、そのような

ことがあって、向上心や自己実現がスポーツメディアの商品化の渦に巻き込まれる。しかし単にドーピングによって身体能力を高めても、やがてそれこそ老化や死につながるという例が、少なくとも新聞報道などで分かる限りでも、かなりありますよね。それをヴィリリオは言っています。

加速社会ということは、彼が言うには、世界がフィルムの早回しのように加速されるんじゃないくて、人間の心臓の鼓動とかは変わらないわけだから、早めようのないものもあるわけでしょう。そういうものじゃなくて、時間が加速される。例として、私がこんなことで言ってみても可能だな、当てはまるだろうと思ったんですが、普通の地図に対して、地下鉄の路線図、あるいはJRの鉄道地図。あれは、現実の地図じゃなくても、駅と駅がつながっているから、それを連ねていく地図。いわゆる時間距離の図。日本列島を時間距離の図でやると、東京・大阪がぐっと近くなって、名古屋なんかも近くなって、そうではないところがぐっと遠くなる。つまり、東京とか大阪から行く最短時間みたいな、時間距離の図みたいなものができたりする場合がありますが、それすらも今は超えていて、図示不能になっている。速度ベクトルの世界で、現代の速度距離の世界を図示するのは、非常に難しい状態になってます。

このように現実が加速化されているということなんですが、実はこのヴァーチャル世界というのは、昔からあるんですね。急に今、出てるわけじゃなくて、有史以来、その前から、人間が夢見たり、想像したり、あるいは何か見えないものを祭る。儀式とか神話とか、あるいはお祭りごとをやったり、日常的世界でない、非日常的と言ってもいいんですけど、そういう世界は、どの民族のどの文化でもあったわけです。ですから、ヴァーチャル的なものは、昔からあるわけです。それが、今、テクノロジーと結びついている。

そうしますと、これも想像できるんですが、宗教的信仰とは非常に相性がいい。なじみやすい。ヴァーチャル世界は、未知の魅力があることも含めて、あるいは触れ難いみたいなものも含めて、宗教と親和性を持つわけです。ヴィリリオ自身は、テクノサイ

エンス万能、つまり光の速度に従ってどんどん進歩していく、「進歩は絶対だ」というような考え方は宗教的な機械信仰だと言っていて、進歩のプロパガンダ、「進歩がいい、いい」というふうに喧伝することについては、反対、批判的であるということです。進歩は、ある意味では両面がありますから、進歩そのものを全体的に否定するのではない。

4. 都市、身体の行方と「恐怖」の管理

現代の身体とか都市はどうなるかということで、現実的なことと言うと、世界的に起きていることは、都市の衰退、日本で言うと、都市の中心地区の衰退。シャッター街という、あの問題です。そのために私が例に出したのは、50 年ぐらい前にロラン・バルトという批評家がいる、彼が、60 年代に日本に何度か来てるんですね。そのことを基に『表徴の帝国』という本を出して、翻訳もあるんですが、彼は、歴史的にヨーロッパの都市は同心円的だと言ってるんです。簡単な話、真ん中ほど価値が高い。中心ほど価値があって、周りに行くほど価値がない。そういう造りがヨーロッパの都市なんですね。

ちょっと話がややこしくなるので、簡単に一つだけ言っておきますと、彼はそのとき、「東京は違う」と言ってます。東京は、江戸城、皇居がある。だから、空虚な中心。東京という都市の一つの特徴で、そのあと建築家とか都市計画者とか、そういうことは言った人もいるかと思いますが、割と知られるようになったのは、バルトがきっかけです。

東京は違うけど、ヨーロッパの都市は普通、中心に向かって同心円的に充実する。つまり、精神文化としてはキリスト教の大聖堂、教会があって、世俗の権力としては官庁・役所があって、金融・貨幣は銀行があって、商品消費はデパートがある。言論交流というのはアゴラという、ギリシャの広場のことですが、カフェとプロムナード。今でもヨーロッパの都市の中心には、大体広場があります。中心に行くほど価値が高いし、充実している。精神的な価値も高い。それが、ヨーロッパの都市のモデルだ。

このことは 50 年前の話です。それが、50 年後の現在、世界各地で中心街がどんどん衰退してるん

ですね。中心に価値があるとされるものが。その代わりに、人々の日常行動において、ヴァーチャル世界が優位に立つ。従来の都市の消費の中心地区が衰退して、シャッター街、デパートの閉店。これは日本だけじゃありません。アメリカやヨーロッパでも。最近のことで言うと、アメリカだとラジオシャック、電化製品量販店。トイザラスはご存じですね。これも事実上の閉店退場となって、今年になって、デパートのシアーズが破産法申請ということになります。もちろんインターネット通販です、一つは。

そういうことで、都市センター機能はヴァーチャル化して、スマホとかパソコンで注文して、役所への届け出とかもパソコンでできる。注文・買い物等の電子化ですね。そうすると、物品・商品は、郊外等の中継地の物流倉庫に保管。だから、必要なのは中心街じゃなくて、物流倉庫ということになる。ヴィリリオはそれを、「都市外」と命名します。人間は身体的存在として都市に居住するというよりも、慣性的に移動する身体、習慣的に移動する身体は、都市のミニチュア化としてのモバイル端末を携え、ヴァーチャルな都市なんですが、購買行動にしろ、バルトの言った五つの要素のどれにでも接近できるわけです。

「モバイル端末を携え、世界の流動化・難民化のなかに流浪」。ヨーロッパの、あるいはアメリカの難民、移民の流動化の現象も、みんな関連します。当然そういう人たちも、スマホとかは持ってるわけですね。持たないと動けないです。そうすると都市は、これはヴィリリオが言っていて、フランス語としてはシェ・ソワなんですけど、アットホームなものから身に着けるものアン・ソワに。近い将来は、体内チップなどの埋め込まれるものになる趨勢にあるというふうになります。

そこで、このようなヴァーチャル世界の蔓延に関して、常にニュースなどである、日本でもそうですが、「恐怖の管理」ということ。彼が 2010 年に言ってるんですが、得体の知れない不安や恐怖ができて、それが、無反省的に同調しやすい情動、エモーションを地球規模で拡大させる傾向がある。今日では、恐怖というのは一つの環境となっている。メディア

によって増幅される不安・恐怖などは、対象がよく分からないから更に増すものですからね。得体の知れなさははらみつ、情報操作の対象となる。政治的管理の対象にもなってくる。よくテレビやコマーシャルなんかで、健康上の不安、あるいは健康食品みたいなことで、そういう情報はどんどん入ってくる。あるいは身の安全を保障するために、国は、軍事力の強化とか、そういうことも出てくる。恐怖を管理する、そういう国家的な傾向が、世界中にあるということです。国家の管理を強める世界的傾向にある。このことをヴィリリオは、『恐怖の管理』という本で言っています。

ヴィリリオそのものは、最後になりますが、進歩そのものを拒んでいるのではなくて、進歩のプロパガンダ、宣伝、機械神への帰依に反対していると言っています。インタビューの「方向を変えていくことができるのですか」の質問に、「相対的な速度の枠内では可能です」と90年代に言っていました。彼自身はキリスト教徒なのですが、「私は革命家ではなくて、啓示家」。レヴオリュショネールではなくてレヴェラショネールという、これは一種の語呂合わせで、彼はよく使います。あるいは「無政府主義的キリスト教徒」というふうにも言っています。

それで、どのようなことが考えられるかということで、時間多様性ということ。それを強調しています。つまり、一律に科学技術の進歩に対してただひたすら追従して、効率一辺倒とかいう形にするのではなくて、時間多様性。生物多様性とか、そういったことから来てるんですね。「全面的な心理学的な速度の様式とは反対に、時間の用い方、生活様式の用い方のリズム学的な文化を置かなければならない」。例としては、暦とか典礼、祭典、お祭りとか、そういうものがヒントとして挙げられる。つまり、24時間中 24 時間という電子取引のようなものではなくて、リズムということを強調した文化を置かなければならないと言っています。その内容がどういものかということとは、われわれも考えなければいけない。一つは、イタリアで発したといわれるスローライフということもあるわけですが、そういうことも含めて、いろいろあるかもしれない。

「総じて自分は、脱オリエンテーション、脱方向づけを考えてきた」と語ってます。どういうことかという、他の本にも出てるんですが、地球から大気圏を脱出して宇宙空間に行くと、アポロなんかもそうらしいですが、上に向いて行きますよね。こういうふうに垂直に座席もなってます。で、地球の大気圏を脱出して行って、上ってどっちなんだろうと。もし月に行くとして、今度は月に落下するわけです。だから、「上昇する」ということが落下にもなるし、あるいは方向喪失になるかもしれないということを言っている。宇宙空間の恒星がなくなったら見えなくなって、暗くなったら闇になって、闇の中では、宇宙船では空間はなくなると言ってるんですね。あるいは沈黙の時間だけみたいな。

ですから、ここで言っている「脱方向づけ」というのは、今のオリエンテーション、今の科学技術の方向だけに行っていると、高みに行くんじゃない、どこかに落下するとも言えるし、方向喪失になるかもしれない。もともとデゾリアンタシオン(désorientation)というのは、精神医学で、患者が時間・空間感覚を喪失する。そういう意味にも使えるわけで、そういうことも込めて、今の方向の脱オリエンテーションということを考えてきたと。彼が言っているのは、そういうイメージもあろうかと。宇宙飛行士、宇宙空間に言及した本もありますので、そういうことも念頭にあるのだらうと思います。上昇と思っていた方向が、落下になるかもしれない。

こんなところで、一旦私の話は終わります。

井上 なかなか難しい話ですね。誰かに管理されていると私が分かっているなら、「私は管理されてる」と思うんだけど、どうも現代の社会っていうのは、管理されているということさえ気がつかないうちに、管理されていたりするようになってくるのかなと。

それでは次に、今の問題について、ヴィリリオさんの議論を土台に、本間先生がお話しになったことについて、グローバル教育センターの山下先生から、「ドゥルーズの管理社会」。今のお話と関連したことを伺いたいと思います。よろしくお願いします。

山下 みなさん、よろしくお願いいたします。私は、駿河台大学グローバル教育センターの山下尚一と申します。本間邦雄先生のご発表を受けて、コメントをさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門はフランス哲学、とくに 20 世紀のフランス哲学です。コメントにあたり、配布資料を用意してきました。A4 サイズ 1 枚のものです。みなさん、お手元にございますでしょうか？それでは、はじめます。

はじめに少しだけいっておきますと、ヴィリリオの思想をこんなにもくわしく丁寧にかがうことができる機会は、ほかではないと思います。もちろんヴィリリオというのはとても重要な思想家ですが、日本で研究している人は比較的少なくて、なかなかちゃんと知ることのむずかしい思想家です。なので、今回の本間先生のご発表は、非常に貴重なものであり、とてもありがたいと考えています。

私のコメントですが、「ドゥルーズの管理社会論について」というタイトルでおこないたいと思います。

私がコメントしようとするのは、管理社会ということについてです。本間先生のプリントのどこに書かれているかといいますと、1 頁目のまんなかあたりですね、「序 機械論の三段階から…」うんぬんというのがあって、その次の行の後ろのほう、「そこで、ヴィリリオもしばしば言及する哲学者ジル・ドゥルーズ (1925-1995) の歴史社会の三形態と、それに対応する機械を参照しよう」とあります。そのあとに、歴史的な社会がどのように進んでいくのかということが書かれています。まず「君主制社会」があって、そこから「規律社会」に進んで、そして「管理社会」「コントロール社会」にいたるんだ、そういうふうにかがれています。この最後の「管理社会」「コントロール社会」というものについて考察を進めているのが、ジル・ドゥルーズという哲学者、フランスの哲学者ですね。私のコメントでは、このジル・ドゥルーズという人の管理社会論についてお話ししたいと思います。

では、私のプリントに戻っていただきたいと思います。

まず、プリントにあるように、規律社会という言葉は、フランスの思想家であるミシェル・フーコー (1926-1984) という人が考え出した言葉です。フーコーによると、近代以後の社会というのは、規律社会なんだといわれています。本間先生は、産業革命以降から規律社会がはじまるとおっしゃっていましたね。この規律社会というものがどんな特徴をもつのかということについては、プリントに三つの特徴を書いておきましたが、コメントでは省略します。で、このフーコーの考えを受けて、ドゥルーズはもう少し考察を進めるわけです。プリントの引用 1 を見てください。引用 1、ジル・ドゥルーズ『記号と事件』(1990)、宮林寛訳、河出文庫、2007 年、358 頁。「〔現代において〕規律社会に取って代わろうとしているのが管理社会にほかならない」。つまり、現代というのは、規律社会から管理社会に移り変わっているところなんだということです。

ここで、会場のみなさんにお聞きしたいのですが、「管理社会」という言葉を聞いたことがありますでしょうか？みなさん、いかがでしょうか？一般に「管理社会」というふうに聞くと、あんまりいいイメージは浮かばないんじゃないかなと思います。管理社会というと、なんとなく自由がないとか、すべて管理されてしまっているとか、そんなイメージがあります。すべてのことが決められてしまっていて、それにしたがわなくちゃならない、そういうイメージですね。個人よりも全体を優先する。そういう全体主義みたいな社会、それが管理社会なんじゃないかというふうに思えますよね。

では、実際の管理社会とは具体的にどういうものなのか。管理社会というのは、プリントにあるように、コンピュータ技術によって管理をおこなう、すべてをデータとして管理をおこなう、そんな社会のことです。じゃあ、そういう管理社会にはどんな特徴があるのか。プリントには三つの特徴を書いておきましたが、このコメントでは、とくにひとつ目の特徴についてだけお話ししたいと思います。先ほど井上所長が、「管理されていることに気づかないうちに管理されている」というふうにおっしゃいましたが、そのことに関連しますね。

1) 管理社会には自由がある。管理社会のひとつ目の特徴は、自由があるということです。そして、その自由を前提にして、管理をおこなうんだということです。先ほどいいましたように、管理社会というふうに聞くと、なんだか自由がない、そういうイメージをもってしまいますよね。すべてのことが決められてしまっていて、全員がそれを守らなくちゃいけない。社会全体が優先されて、個人の自由はなくなる。そんなイメージですよ。けれど、管理社会というのは、自由があるんです。実際、私たちの生活は、自由にあふれていますよね。とくに、コンピュータの技術があるおかげで、私たちはいろんなことができる。インターネットのサイトで情報を見ることができる。メールとかラインをして、友だちと瞬時につながるができる。いろいろできるわけです。けれど、そういうコンピュータ技術によって自由があるんだけど、そのぶん、同じコンピュータ技術のおかげで、管理もされてしまうんだということです。

プリントの引用2を見てください。ちょっと長いですが読んでみましょう。引用2、岡本裕一朗『ポストモダンの思想的根拠』ナカニシヤ出版、2005年、107頁。「押さえておきたいのは、〔中略〕管理社会が個々人の差異を消去し、個人的な自由を否定する「全体主義的統制」ではないことだ。個々人の差異や多様性は前提されるし、また個人的な自由だって十分認められている。ネットサーフィンする自由、携帯でメールを送る自由、ショッピングセンターで買い物する自由、恋愛する自由、子どもを産んだり中絶したりする自由などなど。〔中略〕こうした個々人の自由を前提としたうえで、管理がきわめて巧妙に働くのである。ネットサーフィンすることによって、その人の情報はいたるところにばらまかれる。携帯メールは閲覧されるし、その人がどこにいるかも筒抜けだ。ショッピングセンターでの買い物は監視カメラでモニターされ、何をどれだけ買ったか記録されている。車を使って不倫デートすれば、Nシステム〔自動車ナンバーを自動で読み取る装置〕に掌握されてしまう。着床前診断のために遺伝子検査をすれば、受精卵だけでなく親の遺伝子までもデー

タ化されてしまう。つまり、自由は管理と表裏一体であり、自由であればあるほど管理も進むのである。」

ここでは、重要なことがいわれています。最後の部分ですね、「自由であればあるほど管理も進む」といわれている。一見すると、自由と管理というのは対立するもののように思えるんですが、実はそうではない。私たちは自由であるからこそ、管理されてしまうんだということです。私たちはコンピュータ技術をつかって自由に生活できる。けれどそのぶん、コンピュータ技術によって管理が可能になる。今までよりもはるかに自由に行動できるけれど、今までよりもはるかにこまかい管理がなされる。こんなふうに、管理社会というのはちゃんと自由があるんだということです。そして、この自由というものを前提にしてこそ、管理がおこなわれていくんだということです。これが管理社会のひとつ目の特徴です。

実は、管理社会には別の特徴もあって、それについてはプリントの裏面に書いておいたのですが、時間の関係上、このコメントでは省略します。

私のコメントをまとめますと、ドゥルーズの管理社会論というのは、コンピュータの技術ということを出発点にしている。そして、本間先生が発表なさったヴィリリオという人も、やはりコンピュータの技術について考察していて、とりわけその速度ですね、つまり情報処理や情報伝達の速度というものに着目している。この意味で、ドゥルーズの考えとヴィリリオの考えというのは、深く結びついているということができると思います。

これでひとまず、私のコメントを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

井上 では、続いてマッシュューズ先生にコメントとご意見をお願い致します。

マッシュューズ こんにちは。私は、ジョエル・マッシュューズと申します。オーストラリア出身ですが、今日は主にグローバルな視点から、この問題についてコメントしたいと思います。私はヨーロッパの思想の専

門家でもないんですが、主に東アジアの近現代の歴史を専門にしている、その中でマイノリティー研究をしているんです。日本の例で言うと、アイヌ民族や在日コリアン。アメリカの話で言うと、黒人やヒスパニックというような人たちの研究をしているんです。今日は、本間先生の話聞いて、マイノリティーとわれわれが生きてるデジタル時代の関連について、少し考えていきたいと思います。まずはメディアと情報について、そして、メディアと情報の発展・普及・拡大、そして多様化について、触れていきたいと思います。

よく皆さんご存じだと思うんですが、活字の発展は、中国から始まったんです。印刷できる技術は、西暦で 1000 年ぐらいに中国で発展していて、それを 1500 年ぐらいにヨーロッパに伝えていくんです。まずドイツで、本を出版・印刷する技術が伝わっていきます。そして、1600 年ぐらいにヨーロッパで新聞というものが初めてでき上がり、その 200 年後、1800 年ぐらいに、同じヨーロッパで雑誌というものが発展していきます。そして、そこから電気が発明されることによって、19 世紀、1844 年に、電報というものが初めて発明されます。そして、1870 年代に入っていくと電話、1880 年代に写真、1890 年代にラジオ。それで 20 世紀に入っていきます。

20 世紀に入っていきますと、ビジュアルなメディアが動くようになるんです。動画や映画、テレビが発明されて、日本の歴史で言うと、第 2 次世界大戦後です。20 世紀の後半に入っていきますと、それがカラーになっていって、1980 年代に入りますと、パソコン、コンピューターというものがより速くなって、情報の伝達が速くなり、90 年代入っていきますと、インターネットの技術が発展していきます。21 世紀に入りますと、携帯、モバイルフォンの技術が発展していって、現在のわれわれがよく使っている iPhone やスマホができ上がっていきます。そして、2010 年代、現在のメディアと情報の発展・普及で何が特徴的かというと、SNS です。Facebook、Twitter、買い物でよく使っている Amazon や Google というようなものができ上がっ

ていきます。そのメディアと情報の歴史、流れを聞いていると、情報の伝達だけではなく、発明自体の速度が速くなっていることが、よく分かると思うんです。

ただし、ここ 20 年、特にスマホや SNS と情報という関係についてですが、従来の本・雑誌・新聞、テレビもそうだと思うんですが、それと SNS は何が一番大きく違っているかという情報の正確性を確認できる装置があると、ないってということだと思います。現在は、Twitter や Facebook、SNS を通して膨大な情報が伝達されるようになるんですが、その情報の正確性を見る必要があると思います。本間先生の発表の最後の方に、「進歩のプロパガンダ」という言葉がありました。まさにメディアや情報のテクノロジーが進歩していっているように見られるんですが、そういうふうに捉えがちだと思うんですが、われわれが現在生きてる社会の大きな問題点でもあるんじゃないかと思います。ばくだいな情報が伝達、コミュニケーションされているんですが、その中で、その情報の裏にあるのがミスインフォメーションです。日本語に直すと、誤報やデマ、偽の情報など、最近よくメディアで取り上げられているフェイクニュースです。トランプ大統領もよくこの言葉を使っているんですが、そういう時代に、われわれが入っていると思うんです。

それがもたらした結果として、二つ挙げられると思います。一つめが、ハーバーマスの言葉で言うと「公共性」です。公的な領域において、正しい知識、正しい情報が、ちゃんと伝達されているかです。国民が正しい情報を持っていないと、民主主義がちゃんと機能できなくなるおそれがあると思います。まさにアメリカの 2016 年のトランプが当選された選挙の中で、今、ちょうどアメリカの方で問われていますが、ロシア疑惑。アメリカ国民がデマを多く聞いて、それが彼らの選挙での行動に左右されたってことだと思います。

二つめが、こういうフェイクニュースや、ミスインフォメーションがあることで、現在まである程度封じられた人たちが、自由に偏った情報を流す、伝達することができる時代に入っていると思います。

ます。これは、極端に言いますと、ヘイトスピーチというような現象だと思うんです。偏った、間違った情報を、もちろんインターネットを通して多くの人に発信できるようになっているんですが、アメリカの方で、白人至上主義者やネオナチというような人たちが、この技術を使って人を募ることができるようになりました。

これは本間先生の発表にあった言葉なんですが、ヴァーチャルです。こういう人たちが今まで連帯・連携することができなかったんですが、新たな形で、ヴァーチャルな世界の中でこういう人たちが連帯して、去年の夏にアメリカのバージニア州のシャーロットビルで、白人至上主義者がヴァーチャルな領域で連帯して、現実の世界の中できなり暴力を用いて、誤った、偏った情報のもとに運動することができるようになりました。「進歩のプロパガンダ」というテーマで、言論の自由というのはもちろん重要なことだと思うんですが、われわれが現在生きている社会、世界の中で、無限の言論の自由が、裏に別の危険性をはらんでいます。ありがとうございました。

井上 お二人の先生、どうもありがとうございました。本当に難しい問題なんですが、少し本間先生にご発言いただければと思いますが、今、出てきた問題で、特に 20 世紀の後半以降になって、高度情報化の管理社会が立ちあらわれてきました。つまり、ポスト管理というか、ポスト資本主義というか、その社会になって、先ほど本間先生は「恐怖の管理」ということをおっしゃいました。そして、山下先生は、管理と、そのコントロールと自由というのは併存しながら、しかし、それをどう考えるかという問題提起をなさいました。その辺のことが一つ。

それから、マシューズ先生は、現代の社会の管理という問題と民主主義の価値というものを論じられました。それに関連して、ヴィリリオの論を発展させていけばどうなるのかというようなことがあるかと思うんですが、そうしたところも含めて、本間先生から発言をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

本間 山下先生の自由と管理の問題は、確かに簡単に腑分けできるんじゃないくて、ヴィリリオもいつも「進歩には裏表がある」と言っているわけで、単純な進歩のプロパガンダに対して反対と言ってる。彼は、「事故の博物館」というのを 90 年代から提唱していて、日本でも『朝日ジャーナル』で浅田彰と対談したりして、もう 20 年以上前ですかね。というのがあります。

彼は、進歩すると、それだけマイナス面も出ると。簡単に言うと、500 シートの飛行機を発明すれば、500 人の死者が出る可能性も当然それに付随する。それは、別にパシミストとかそういうことじゃなくて、簡単に考えれば誰でも分かることだと。文明が進歩すれば、昔は馬車の事故、鉄道の脱線事故だったのが、今は飛行機事故とか、あるいは原発なんかもそうでしょう。そのようになるということ言っていて、必ず両方から見なきゃいけない。そういう認識があるわけです。ですから、管理と自由の関係も、今ここで結論を出すとか、そういう問題じゃなくて、そういう中にわれわれはいるということで、更に考えなければいけない。

ただ、今、反射的な思考を求められる時代なので。どうしても「速い、速い」ってなると。ただ、反射的思考では捉えられない、あるいは難しい面も当然あるわけで、彼は、反射のレフレックスじゃなくて、レフレクション、反省。納得する、説得する、あるいは理解するには、一定の時間が必要だという。時間多様性と言ってるのは、ゆっくりした時間と通常の速い時間という、両方のことを考えていたわけだと思います。

マシューズ先生のおっしゃったことは、この前、教育テレビで自閉症の人たちが、仮想空間だと、現実世界で難しいとされる自由な議論や他者への共感が、セカンドライフ内では行われるということをやってまして、見てたんですけど、そういう面は確かにあるんですね。ヴァーチャル世界についても、それがこのような形で使われるということは、マイノリティーの問題とか、そういうこととも関わるかと思っています。

したがって、リアリティーとヴァーチャリティー、

両方ある世界にわれわれは生きてるという認識が、必要なんだろうと思います。その兼ね合いというか、それを更にそれぞれ考える。あんまりヴァーチャリティーに引かれると、電話のおじぎみみたいなことばかりやっていると、現実の身体がなくなる。電話で、偉い人かなんかで、ついおじぎしてしまうという。あれは、ヴァーチャル世界に対して引き込まれて、それに合わせて現実の身体が、そのような姿勢になってしまうってことですよね。「そうなんだな」というように理解することも含めて、ヴァーチャリティーとリアリティーの両方について、今、進行中のことなので、それは考える必要があろうかと思います。

井上 あまり時間もなく、お一方ぐらいしか時間がないかもしれませんが、何かご質問いただけますでしょうか。

A 今日は、はがきもらいまして、どうもありがとうございました。講演とちょっと関連性があることで、現在フランスで「黄色いベスト」のデモがあって、私、あれ、驚いてるんですけど、商店街もぶち壊しっていうことで。今、この話を聞きまして、恐怖管理。あれは、上流社会の政策、地球環境問題のガソリン税どうのこうのっていうことだけど、その他に、今のいわゆる管理恐怖ですか。こういうあれがバックにあるような気がして、今、思ったんですけど、今回のこの講演の中で、あのストライキがそういう今の思想の中にあるものなのかどうか、ちょっと伺いたいと思うんですけど。

本間 一つは、まずデモするのは、習慣的に行われてるんですね。デモはフランスの場合、他もそうかもしれませんが、日本と違って、一つのお祭りごとなんです。行事なんですね。労働組合のやるようなもの。ですが今回は、私も新聞記事しか知らないんですが、割と自然発生的な、それこそ労働組合の動員とかでは必ずしもないということで、フランス革命以来、その前から、街頭に出るっていうのが権利として市民にはあるという意識はずっとあるので、

今回もガソリンについて不満が出たっていうのは、農民たちも、十何年前かな。もうやってられないと作物などをばらまいたとか、そういう示威行動、デモンストレーションはよくやってる。そのうちの一つで、グローバル社会の問題なんで、その中でよく圧迫されるのは周辺の労働者とか、農民のような階層だという、そういう意識は共有されてるんだろうと思います。

ただ、あの映像が出ると、「あそこもやってるな」みたいな、今度は自分たちもという波及効果はあると思いますし、便乗して騒ぐ輩も出てきます。恐怖という場合は、「こうなったら困るんじゃない？」という、むしろ庶民とか一般の人たちに恐怖とか不安を与えて、それを国家が管理してやると。警察権力でとか。そういう形になるのが今回の話の「管理」ですが、行く末は確かに要注目です。フランスの国民性的な、歴史的な背景もあるけれども、それがどう展開するかは、グローバル経済のわれわれにとっても非常に密着した、大事な問題なので、マクロンがどう対応するのかということも、彼も正念場かもしれないです。

井上 まだまだご発言したり、質問されたりしたい方いらっしゃると思いますが時間が来てしまいました。次の時間、授業がある先生もいらっしゃるので、これでお開きにしたいと思います。最後に本間先生に拍手をお願いいたします。ありがとうございます。それでは、今日は本当にありがとうございました。

(録音終了)